



富国に一生を投じた 日本における消火器の祖

たかぎ ぶんべい
高木 文平 (1843~1910年)



株式会社 初田製作所

本社所在地：大阪府枚方市招提田近 3-5
創業：1902 (明治 35) 年 12 月 1 日
事業内容：各種消火システム・特機システム・警報システム・各種消火器・防災関連機器の製造

従業員数：290 名
資本金：8,000 万円
設立：1947 (昭和 22) 年 8 月 19 日

田舎侍から一庶民へ

1 843(天保 14)年 3 月 31 日、高木文平は丹波の国北桑田郡神吉村(現・京都府南丹市)という、周囲を山々に囲まれた小さな盆地に生まれた。江戸時代の神吉は、上村、下村と和田村に分けられており、その上村と和田村は篠山藩の領地で、下村は旗本武田兵庫の領地であった。高木家は代々下村に住み、文平の曾祖父までは大庄屋を勤めていた。当時の神吉では全村農業を生業とし、各村に 1 年から 3 年交代で庄屋を選んでいた。庄屋を多年にわたり勤め、しかも領主代官への年貢納物に滞りなく、一村を治める功績大と認められたものが大庄屋または大名主となり、苗字帯刀の待遇を与えられていた時代である。

1862(文久 2)年、文平は 19 歳で武田家の用人見習いのため江戸に移ったが、父・正福が 1867(慶應 3)年に没すると、文平は 24 歳の若さで家督を相続し、代官職に就いた。文平が江戸へ行った翌年には、アメリカとフランスの軍艦から下関が砲撃され、イギリスからは鹿児島が砲撃された。欧米列強の侵略がアジア全域に及ぼうとしていた最中に、日本では明治維新があり新政府が誕生した。維新で腰の刀を捨て、富国強兵を国是とする日本の一庶民となる志を決めた文平は、「ワレ日本第一ノ良民タラン」との誓いを立てた。丹波の山奥の田舎侍が、これからの明治という激動の時代に、新しい日本国の一庶民として生き抜いていかなければならないと定めた覚悟であった。



丹波神吉文平私学での兵式体操の様子

私学校を設立 未来の人材育成に力を注ぐ

維新の騒動も一段落した頃、階級を失い一庶民となった文平は考えた。「これからはこの国をどう守っていくかが国家の急務であり、国民の一人ひとりが心を入れ替えて努める以外に道はない。」文平は今後の日本に必要なのは人材の育成、若者の教育であると考え、1869(明治 2)年に神吉の地に私学校を開校した。自らの財産、歳入を見積もり、歳出を儉約すれば、自分の資力だけで学校を維持することができると見込んだことだった。近くに住む若者を誘い、入学金、授業料は一切受け取らず、専門の教員を招聘して修身、読書、算術、習字、体操の 5 科目を教えた。文平はこの私学校を愛し、人材育成に心血を注いでいたが、1872(明治 5)年に神吉村が京都府の管轄になると、当時の知事の方針で学校の一切を京都府に寄付することにした。

丹波から京都へ

維新直後から文平は何とかして村をより豊かにできないものかと率先して開墾、植林、養蚕、茶畑など地元の産業を奨励し、周辺で次々と土木工事も興した。文平はこの頃、神吉周辺地区の区長という役割についていたが、ある日突然、京都府庁より文平に登用の話が持ち込まれた。文平の奉仕の精神が認められてのことだった。一度辞退した文平だったが、結局引き受けることにし、しばらくの間京都府庁で勤めた。これが、文平がその後の生涯を京都で過ごす起りとなった。



1902 (明治 35) 年の創業以来、「かけがえない生命と大切な財産を守ること」を目指してきた初田製作所

京都商工会議所を設立

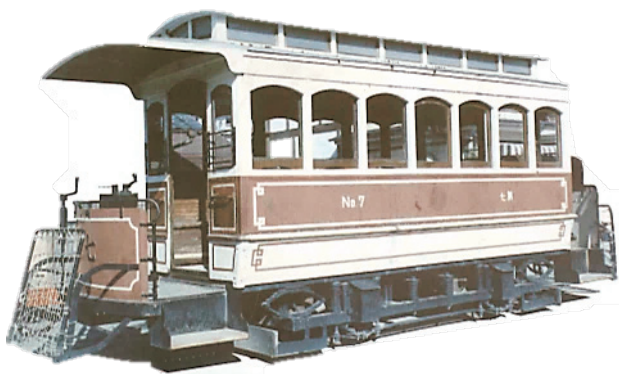
その頃の京都は、1869(明治2)年に事実上の東京遷都が行われ、千年の古都が首都としての機能を終えた。東京への遷都後は、横浜や神戸が急速に発展していくのに反し、京都は日に日に衰退していった。

時代の流れを感じた文平は、京都を立ち直らせるには貿易の振興が重要なのではと思い立ち、まず何よりも外国の実情を視察調査する必要があると考えた。その結果1877(明治10)年にフランスで開催された大博覧会に自費で視察員を派遣し、京都の産品を出品した。

欧米の文化に触発された文平は、自分と同じく今一度京都を繁栄させたいと願う財界人に声を掛け、皆で一致団結して京都を復興させようと京都商工会議所設立願書を京都府知事に提出した。1882(明治15)年、願書は無事認可を得て、有志会員組織の私的団体として出発、初代会長に就任した。

京都復興に心血を注ぐ

文平は京都のために数々の偉業を成し遂げた。1890(明治23)年には琵琶湖疎水を発電に利用することを進言し、日本初の水力発電所である蹴上発電所を完成させた。またそこで発電した電力の有効活用法として、かつて水力発電研究のため渡ったアメリカで見た市街電車を日本に初めて導入することに成功した。1894(明治27)年、文平は京都電気鉄道を創設、これがわが国初の電気鉄道事業であった。



京都電気鉄道

日本最初の電気鉄道。1895(明治28)年2月に伏見線が開通。以後、市内線として木屋町、北野、出町、堀川、西洞院、寺町、丸太町、下立売、鴨東の各線が開業。1910(明治43)年には出町線を除くすべてが複線化された。

二重瓶消火器の誕生

技術者として、また経営者として京都の発展に尽力する傍ら、文平にはもう一つ気がかりなことがあった。

京都府下には寺社仏閣をはじめ、数多くの歴史的建造物が存在し、その多くが木造であったことから、一度火の手が上がると瞬間に燃え広がり焼失してしまうということが、消火設備の整っていない当時は少なくなかった。木造建築であるため、一度焼失すれば再建の困難なものばかりで、それがひいては日本文化の喪失であり、国家的損失であると、文平は火災の脅威に憤りすら感じていた。

京都の未来を見つめると同時に、先人から受け継いできた文化を守っていくことの重要性を確信した文平は、技術者としての経験と、海外視察で得た知見で、1894(明治27)年、日本初の「二重瓶消火器」の考案発明に成功した。当時、英仏で一般的に使用されていた回転式消火器とは異なった仕様にこだわり、専売特許を獲得。京都市二条木屋町にて、現在の(株)初田製作所の前身である高木消火器店を立ち上げ、消火器の製造販売を開始した。

個の利ではなく公の利に

→ 重瓶消火器は、使用する薬剤、硫酸、重曹を2つの組み合わせたガラス瓶に封じ、薬剤効果の変化を防ぐという独特なものだった。当時としては画期的な二重瓶消火器の誕生は、多くの京都の有識者から注目を浴びた。

この有意義な事業をさらに発展させるため、1902(明治35)年には文平の友人である初田利兵衛が高木消火器店より消火器の特許権及び営業権の一切を引き継ぎ、京都市河原町三条で「二重瓶消火器株式会社」を設立した。

初田利兵衛は文平と同じ北桑田郡の山國村というところの生まれで、家は代々林業を営み、京都嗟峨で製材業を営んでいた。山國村の村長を務めたこともあり、文平と同じく京都の繁栄を願った有識者の一人であった。



二重瓶消火器(左)と初田利兵衛(右)

防災のパイオニアとして

→ 重瓶消火器(株)は当時としては先進的な株式会社
→ の形式をとり、取り扱う消火器同様、社会的に意義のある企業として注目を集めた。当時の営業報告書によると、初年度の販売台数は1,269台にもなった。

着々と事業の基盤を築いていた2年後の1904(明治37)年、社業の発展拡大を目指して本社を京都から商都大阪に移転し、一貫生産体制を整えた。これにより事業は飛躍し、1915(大正4)年には蚕室の消毒用昇汞噴霧器の発明に成功。以後、1944(昭和19)年に社名を初田工業株式会社と改めた。その後、第二次世界大戦が終結し、戦後の日本再建に対応するべく消火器部門を分離独立させ、新しく「株式会社初田製作所」を設立、社会的使命を担って新たな第一歩を踏み出した。設立翌年の1948(昭和23)年、東京営業所開設を皮切りに、次々と主要都市に拠点を構えて全国販売網を築き上げ、総合防災企業への基礎を固めた。

消防法や建築基準法の施工により国民の防災意識が高まる中、消火器は増えゆく需要と共に進化を続けた。特に1963(昭和38)年に開発された胴体に継ぎ目のないシームレックス消火器は月産8万台の量産体制を確立し、2年後には製法の国内特許を、そしてそのさらに2年後には米国特許を取得した。そして現在、同社は様々なシーンに合わせた消火器、消火設備を開発。日本の至るところで同社製品は活躍している。



大阪市西区南堀江にあった往時の大阪本社(大正時代)



昭和初期に発行されたカタログ

創業当時の思いを形に

創 立当時から使用されていたダブルリング(双輪)の商標は、1907(明治40)年に商標登録された。これは初田製作所の前身である高木消火器店の時から使用されているもので、当時製造していた消火器が二重瓶式であったことから、それを図案化して輪を二重にしたものである。輪は円満を意味し、それを2つ合わせることによって和を表明し、創立以来社会に奉仕する同社のシンボルマークとなっている。



ダブルリングの商標(上)
と商標登録証(右)



富国に一生を投じた文平の願い

初 田製作所は今年創業116年を数え、明治、大正、昭和、そして平成と幾時代をも超えて人を想い、文化を想い、火災から社会を守るために、たゆまぬ技術の研鑽を重ねてきた。そこには日本における消火器の祖高木文平の熱き思いが託されている。

後に著された文平の略伝には、次のような言葉が紹介されている。「国家的の思想で遣ったことは自分の収利にはならぬと云ふことは当然のことで、爾も利を懐にするよりは又一段楽しみなものです。」文平が自らの利益を度外視し、個人や会社のためだけでなく、国や故郷の公益のために働くことに確かな意味を見出し、楽しんでいたことが窺える。

「火災の脅威から大切な建造物や文化財を守りたい。」文平の崇高な思いは脈々と受け継がれ、安全で安心な地域社会づくりに貢献し続けている。



現在の主要製品群